

着心地の良い衣服パターン設計 (第6報)

— ジャケット背面の変形歪 —

○佐藤眞知子 池田和子 渡部旬子 宮川由香 陳淑華

目的 動作時の着衣の変形が衣服パターン上のどこでどの様に起きているかは、衣服パターン設計において、人体の採寸値と衣服パターンの関係を明らかにするために重要なことである。着心地の良い衣服パターン設計を目的として、動作時の着衣による拘束量を布の伸長・圧縮歪量として測定し、その分布から着衣の動作追従状況を捉えた。

方法 測定に用いたのは、タテ・ヨコ2方向の歪を同時に測定する変形 Ω ゲージタイプの歪ゲージ式2軸センサー(第3報にて報告)である。測定部位は、ジャケットの着心地評価に大きく影響を及ぼす背面に特定し、測定位置はデータが衣服パターンに直接反映しやすいように、パターン設計上基準となる右半身の線上の14点とした。これをモデルに着用させ、両上肢前挙動作時の歪を繰り返し3回測定した。

結果 動作によって受ける着衣の変形歪量は一律でなく、歪が多いのは背幅中央を通るタテ線とそれに直交する袖ぐり底線であった。背幅線より上の襟ぐり・肩線付近では、歪はタテ・ヨコ方向共に圧縮しており、背幅線より下の測定部分では全てヨコ方向に伸長、タテ方向に圧縮していた。上肢の運動機構から、ヨコ方向の歪は肩付近では前挙 45° 、 90° 、 135° と角度を増すにつれて大きく圧縮されているが、袖ぐり底線では逆に伸長している。背幅線では、前挙 45° のヨコ伸長が最大で、 90° 、 135° と動作につれて徐々に減っている。これらタテ・ヨコの歪測定結果を合成してベクトル表示とし、ベクトル長から歪の量・方向・集中度をみると、どの前挙動作においても着衣の変形挙動の傾向はほぼ一致していた。